

アドバンスト施設による 次世代介護機器導入事例



社会福祉法人 久盛福祉会

施設名 特別養護老人ホーム生寿園

本日お話しする内容

- 施設概要
- 導入した次世代介護機器
- 導入の手順
- 取組内容（手順 1 ～ 6）
- 導入に関わった職員が機器を活用して良かったと感じたこと
- 取組を通じて気づいたこと・重要と感じたこと
- 次世代介護機器導入を考えている事業所の方へ伝えたいこと

施設概要

運営法人	社会福祉法人久盛福祉会
施設名	特別養護老人ホーム生寿園
所在地	大田区萩中2-3-10
定員	特別養護老人ホーム81名 ショートステイ9名 都市型軽費5名
平均介護度	4.1
職員数	67名(うち介護37名)
特徴	法人本部が秋田県にあり、秋田の食材を取り入れる等している。秋田県版CCRCを実現すべく、東京都大田区にも二つの特別養護老人ホームを開設している。令和元年度に眠りSCAN、令和3年度に眠りSCAN-EYE、令和4年度にSASUKEを導入、今後も積極的に導入を図っていく。



導入した次世代介護機器

メーカー名	ザ・ハーモニー株式会社
機器名	認知症コミュニケーションロボット 「だいちゃん」
台数	4台



導入した次世代介護機器

メーカー名	パラマウントベッド株式会社
機器名	エスパシアシリーズ
台数	3台



導入の手順

導入の6つの手順

取組期間：
約10カ月

取組実施者：
約5名

手順 1	改善活動の準備をしよう	● 情報収集 ● 取組に対する組織全体での合意形成 ● 実施体制の整備
手順 2	現場の課題を 見える化しよう	● 課題の見える化
手順 3	実行計画を 立てよう	● 導入計画づくり ● 対象利用者の選定
手順 4	改善活動に 取り組もう	● 導入準備 ● 次世代介護機器の活用 ● 小さな改善活動
手順 5	改善活動を 振り返ろう	● 効果検証 ● 上手くいった点、いかなかった点の整理・分析
手順 6	実行計画を 練り直そう	● 実行計画の練り直し

出典：「介護ロボットのパッケージ導入モデル（改訂版）」をもとに作成

手順 1：改善活動の準備をしよう

取組期間：5月1日～6月30日

手順 1

- 情報収集
- 取組に対する組織全体での合意形成
- 実施体制の整備

● 情報収集

- ・福祉機器展にて導入可能な機器の選定し、ICT委員会にて検討
- ・デモ機を導入し施設内で実際に使用する、施設内全職員へ向けて導入研修会実施
- ・施設内の設備で使用可能かどうかの検討

● 取組に対する組織全体での合意形成

- ・ICT委員会を設立し、各ユニットからの意見を募る（月1回）
- ・実際にデモ機の導入、期限を決めて各ユニットで使用する
- ・デモ機を返却しICT委員会にて意見をまとめた後、施設長から理事長へ報告。
費用対効果について説明したところ、購入することが決定した。

● 実施体制の整備

	役職	チーム内での役割
1	施設長	チームリーダー・統括
2	介護課長	介護職員への情報伝達
3	機能訓練指導員	リスクマネジメント
4	事務	連絡調整

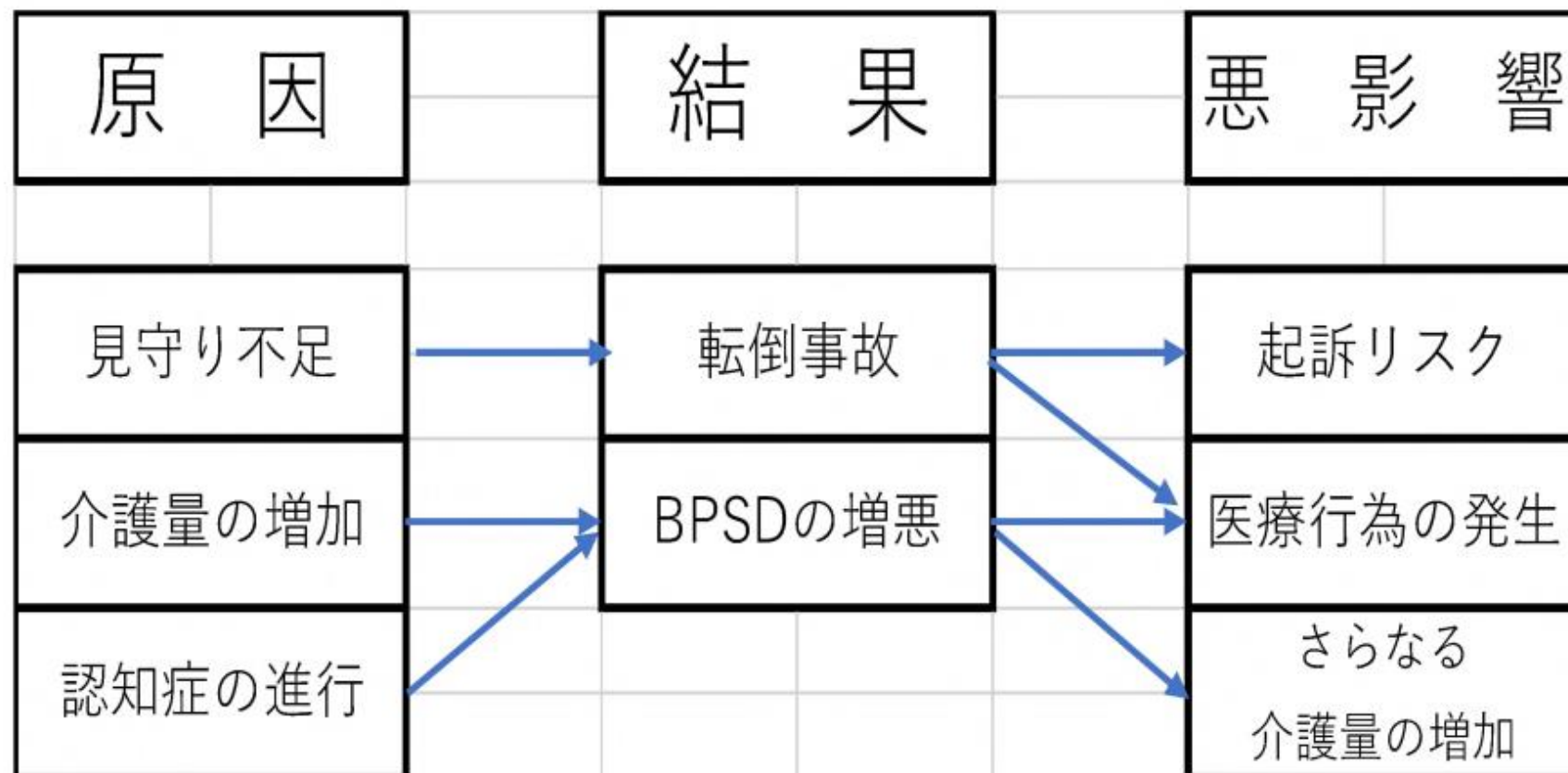
手順 2：現場の課題を見える化しよう

取組期間：7月1日～8月31日

手順
2

- 課題の見える化

● 課題の見える化



手順 3：実行計画を立てよう

取組期間：9月1日～9月30日

手順 3

- 導入計画づくり
- 対象利用者の選定

● 導入計画づくり

□ 課題解決に向けた道筋

- ① 認知症で立ち上がりが頻回の入居者と双方のコミュニケーションをロボットにってもらい、コミュニケーションの間に他の入居者への介助を行い、見守り時間の削減を図る。
- ③ 立位や歩行に不安のある入居者の離床後の事故を事前に防止することと、死角の多いユニットの作りのため、見守りし辛い居室でも転倒リスクのある方を安全に受入出来るようにしたい。

□ 導入する次世代介護機器

認知症コミュニケーションロボット「だいちゃん」
エスパシアシリーズ

□ 成果指標

ユニット内の職員配置が1名の時間帯（9：00～12：00、16:00～21：00）の時間帯の転倒事故率

手順 3：実行計画を立てよう

取組期間：10月1日～11月30日

手順 3

- 導入計画づくり
- 対象利用者の選定

● 対象利用者の選定

□ 選定した利用者

- ① 認知症で立ち上がり頻回の入居者（認知症コミュニケーションロボット）
- ② 起床時転倒したことがある入居者（センサーベッド）

□ 選定理由

- ① 立ち上がり頻回の入居者の机の前に置くことで、認知症コミュニケーションロボットと会話してもらい、気分を落ち着かせることで他の入居者の介助に安全に入るため
- ② 起床時センサーベッドからのアラームを受け、安全に起床後の介助が図れるようにするため

□ 選定する際に留意した点

- ・ センサーベッドについては入居者に使用する際、事前に家族に説明をした。

手順 4 : 改善活動に取り組もう

取組期間：12月1日～12月31日

手順 4

- 導入準備
- 次世代介護機器の活用
- 小さな改善活動

● 導入準備

①認知症コミュニケーションロボット「だいちゃん」の研修を実施

ユニットリーダー、看護師全員が参加し、使用方法について共有をした。
デモンストレーションを通じて、どのような対象者を選定すべきか業者を通じて意見交換を行った。
多機能なため、2回に分けて実施した。

②センサーベッド研修

ユニットリーダー、看護師全員が参加し、使用方法について共有をした。
デモンストレーションを通じて、どのような対象者を選定すべきか業者を通じて意見交換を行った。
対象者を想定し、まずは職員自身がベッドに寝てもらい、機能を実感した。

手順 4：改善活動に取り組もう

取組期間：1月1日～3月31日

手順 4

- 導入準備
- 次世代介護機器の活用
- 小さな改善活動

● 次世代介護機器の活用

□ 「効果的に活用するコツ」

- ・ 認知症コミュニケーションロボットをかわいいと思ってくれる対象者をまずは選定し、使用してみる。
- ・ 転倒リスクの高い入居者選定した。

□ 「効果的に活用できなかった原因」

- ・ 認知症コミュニケーションロボットが多機能で使いこなせなかった。

手順 4 : 改善活動に取り組もう

取組期間：1月1日～1月31日

手順 4

- 導入準備
- 次世代介護機器の活用
- 小さな改善活動

発表時間
目安
1分

● 小さな改善活動

□ 改善活動の内容

- ・ デモンストレーションを再度実施し、レクで認知症コミュニケーションロボットを使用出来るようにした。

□ 改善活動の共有方法

- ・ レクを他のユニットリーダーに見てもらうことにした。



手順 5：改善活動を振り返ろう

取組期間：2月1日～3月31日

手順 5

- 効果検証
- 上手くいった点、いかなかった点の整理・分析

● 効果検証

□ 職員ヒアリング

- 職員 7 名へヒアリングしたところ下記の回答があった。
 - ① 認知症コミュニケーションロボットを入居者の前に置くことで安心して他の入居者の介助が可能となった。
 - ② 普段、BPSDの症状があり、暴言などがある入居者の機嫌の良い時間が増加した。
 - ③ 転倒事故率の検証には至っていないが、センサーベッドの反応が早いため「他入居者の介助中でも、これまでよりも余裕を持った対応が可能となった」という声が職員より寄せられた。

手順 5：改善活動を振り返ろう

取組期間：2月1日～3月31日

手順 5

- 効果検証
- 上手くいった点、いかなかった点の整理・分析

● 上手くいった、いかなかった点の整理・分析

□ 上手くいった点・その要因

- ・ 介護課長、機能訓練指導員が中心となり、対象者を選定したのでセンサーベッドはスムーズに導入出来た。

□ 上手くいかなかった点・その要因

- ・ 認知症コミュニケーションロボットの使用について、入居者への使用開始の導入部分については介護職員の経験に拠るところが多いため、導入後、ユニットリーダー同士で情報共有を密にすべきだった。

手順 6：実行計画を練り直そう

取組期間：3月1日～3月31日

手順 6

- 実行計画の練り直し

● 取組内容の見直し

□ Before

- ・ 認知症コミュニケーションロボットだ
いちゃんの使用の導入部分や使
用方法について介護職員の理解
度のバラつきが見られた。

□ After

- ・ 業者によるフォロー研修を実施。
事前に聞いておきたいこと、有効
活用出来ていないフロアの担当者
から事前ヒアリングを行い、成功事
例などを共有を図った。

導入に関わった職員が機器を活用して良かったと感じたこと

- 認知症コミュニケーションロボットの活用により、転倒リスクのある入居者がテーブルの上に集中するため立ち上がりを防止することが出来た。そのため、他入居者の介助を安全に行うことが出来た。介護職員が焦らずに他入居者の介助を行うことが可能となり、入居者、介護職員双方の精神的負担を軽減することが出来た。
- センサーベッドを利用することで、起き上がり～立ち上がりの際、安全に見守りを行うことが出来るようになった。

取組を通じて気づいたこと・重要と感じたこと

- 業務負担の軽減を目的に新しい機器を導入するが、導入当初は逆に負担が増えてしまうことがあり、使用することに抵抗を感じたり、使用方法の幅を広げることに戸惑いを感じる様子が見受けられた。勉強会の開催、他施設での事例紹介、新しい使用方法の提案等、継続的に施設全体で取り組む姿勢を打ち出していくことが必要であると感じた。
- 具体的に効果を数字にすることは難しく時間を要するが、効果があったと実感できる体験の積み重ねが得られるよう、本当に必要な対象者を選定することが、とても重要であると感じた。

次世代介護機器導入を考えている事業所の方へ伝えたいこと

- 3年連続アドバンスト施設に選定され、ICT機器を導入することで、業務の幅が広がり介護職員のモチベーションが向上する。
- 介護職員の負担軽減を念頭に取り組むことで、実際に業務が効率化され入居者サービスの向上に繋がる。
- 施設見学の際にアピールポイントになる。
- 介護職員が「まずはやってみよう」と主体的に取り組める環境を施設全体で作っていくことで、職員間のコミュニケーションが促進される。
- 介護職員の人員不足を考えると、将来に繋がるメリットがあると予想される。